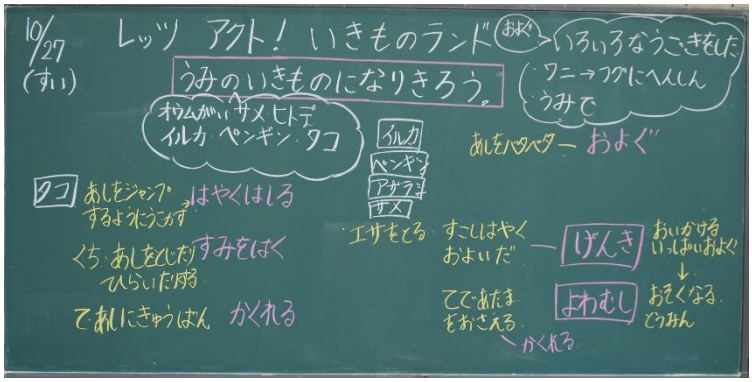
１　授業の実際

本単元において、大切にしたい見方・考え方は、「なりきって表現する楽しさに着目すること」である。子どもの言葉では、「はやく泳いで楽しかったよ」や「場面が変わっても、その生き物らしく踊れたよ」といったものである。表現遊びに取り組む際、子どもたちはこれまでの経験を基に、身近な題材のイメージをもち、全身の動きで表現する。その際、表現遊びの特性である、「なりきって表現する楽しさに着目する」ことで、非日常的な動きにも目を向け、動物や海の生き物等になりきって、全身の動きで自由に踊ることができると考えた。

導入場面において、海という場所を確認し、どんな生き物がいるのかを問うと、タコやペンギン、イルカなど様々な海の生き物が出た。そこで、タコになりきってみようと促すと、数人の児童が思い思いのタコを表現した。それを見た子どもから、「おもしろい動きがあった」という発言があったので、動き方や体の動かし方を確認し、活動に入った。

活動の中で、子どもたちはタコ以外にも、アザラシやサメなど思い思いの生き物になりきっていた。泳いだり、墨を吐いたり、隠れたと、なりきってしたことを伝える子どもたちに対し、体をどのように使って表したか問うと、足をバタバタ動かしたり、手足に吸盤が付いているイメージでくっついたりと、体のどこをどのように使うか表したい感じが変わってくることを確認した（創出）。その後、「元気な」「臆病な」海の生き物なりきるよう促すと、特徴を捉えた上で、動く様子や体の動かし方に変化を付けて表現する姿が見られた（創出）。本時の最後では、楽しかったことは何かについて振り返った。「ふぐになって泳いだことが楽しかった」、「色々なことがおこる中（場面の変化）で、様々な動きをしたことが楽しかった」などと、海の生き物の特徴を捉えてなりきって表現することの楽しさに着目した発言が出た（受容）。



２　今後に向けて

体の使い方や表現の仕方を明示していくことで、子どもたちの表現の幅が広がり、「なりきって表現することの楽しさに着目すること」に繋がっていった。一方で、何度も活動を止めて黒板の前に集めてしまったことで、表現遊びの世界に入り込んでいく時間、つまり没入していくことがあまりできなかった。何度も集めるのではなく、活動の中で、子どもたちを価値付けていったり、よい表現（体の使い方や表現の仕方）をしている子どもを紹介したりすることで、表現遊びの世界に没入していくことができたと考える。その先に、なりきって表現することの楽しさが深まっていく子どもの姿があるのではないだろうか。体育科として、活動の中で運動の特性に着目した楽しさを感じ取り、子ども自身が必要感をもって「する・みる・支える・知る」関わり方をしていく授業づくりをめざしていく。